社会階層が学習態度に及ぼす影響：下層出身者の社会的排除の観点から

The influence of social stratification on students' attitude toward study : From the view point of the social exclusion of lower-origin students

テーマ：社会化と人間形成
指導教員：片瀬　一男

教養学部　人間科学専攻
0351117　加藤　健輔

1. 問題意識

現在、日本をはじめ先進諸国では、階層が世代間で再生産されることによって、格差が固定化するようになっているという。苅谷(2001)は、こうした階層の再生産が、学力格差を広げるということ以前に、学習に対する意欲の格差（インセンティブ・ディバイト）を拡大することによって生じていると指摘している。また、こうした格差の拡大から、さまざまな生活に関するリスクが生じることによって、もともと不利な条件にある下層出身の子どもたちは、次第に社会的に排除されていく（樋口 2003）。さらに、これらのリスクの重層化は、下層の家庭において労働による搾取、消費による収奪、進路の剥奪という「トリプル・エクスプロイテーション（三重の搾取）」（鍋島 2003）という形で存在している。つまり、こうした意欲の格差から、下層の子どもたちは文化的・社会的に排除され、そのことが連鎖的・重層的に教育達成や職業達成を阻害していると言える。

そこで、本研究では文化資本の転換をリスクの重層化による社会的排除の一環としてとらえ、下層出身者の学力を阻害する要因を、文化資本の転換を基盤とした社会的排除がもたらす学習意欲や学習態度の格差に着目して研究した。

2. 研究方法

本研究を行うために片瀬ら(2005b)がおこなった「教育と社会に対する高校生の意識」第 5 次調査のデータを使用した。この調査は 2003 年に仙台圏の高校 10 校で行われ、標本数は高校生票 1399 票、父親票 804 票、母親票 978 票である。

なお、この調査には、高校生の出身階層（親の学歴・職業）や文化資本に対する親和性（家庭の蔵書数や娯楽的消費行動）、さらに学習意欲の指標となる学習時間といった変数があるため、出身階層が文化資本の転換を経由して生徒の学習意欲に及ぼす影響についての分析が可能である。

3. 分析結果

本研究では下層出身者の社会的排除という点から学習意欲の格差について分析した。その結果、まず親自身の文化資本については、社会階層が高いほど客体化された文化資本（蔵書数）が豊かであり、正統的読書文化資本に親和的であった。また、あわせて客体化された文化資本が豊かであるほど、正統的読書文化資本に親和的になることがわかった。つまり、親の文化資本の転換には、ブルデュー（1979=1986）が指摘するように、経済資本（社会階層）から客体化された文化資本（蔵書数）を経由して身体化された文化資本（読書ハビトゥス）へと転換されるという図式が当てはまるといえる。すなわち、低階層の親は、経済資本から正統的な文化に接触できずにいると同時に、社会階層から客体化された文化資本を通じて身体化された文化資本も剥奪されるというリスクの重層化の中にあり、その結果、社会的排除に陥っていることが明らかになった。

そして、子どもの文化資本の転換についても、正統的文化については、親と同様に、社会階層の不利益が、客体化された文化資本を通じて正統的読書文化資本の剥奪に転換されることがわかった。また、下層出身者すなわち正統的読書文化資本に非親和的な者ほど、娯楽的消費文化に親和的になることが明らかになった。これは被差別部落の生徒を研究した鍋島（2003）の知見と合致する。下層出身者は階層を基盤とし、客体化された文化資本を通じてリスクが重層化（集積）し、結局、正統的読書文化資本に非親和的になるとともに、娯楽的消費文化への接触を高めるといえよう。

また、学習意欲の規定要因には、正統的読書

文化資本が最も有意な正の影響を与えており、娯楽的消費文化は学習意欲の形成にあまり影響を与えないことが明らかになった。

これらのことから、出身階層が低い者の家庭では、客体化された文化資本が乏しく、その結果、子どもたちは読書文化資本に非親和的なるというリスクの重層化によって文化的・社会的に排除され、学習意欲が低下するといえよう。

４．考察と結論

以上の結果から、文化資本の転換を基盤とした子どもの学習意欲の形成は、正統的文化（正統的読書文化資本）によって規定されており、娯楽的消費文化はあまり影響を与えないことがわかった。しかし、ブルデュー（1979=1986）は、文化資本は社会階層によって異なっており、上位階層にある者たちは自分たちの文化を占有し、他の階層をその文化から排斥すると指摘している。また、片岡（2000）は、日本では高階層の者と低階層の者で接触している文化に差はないようにみえるが、実は大衆文化への接触には階層による差がないものの、正統的文化への接触では階層で差があり、「文化的な境界」が存在しているとしている。

さらに、鍋島（2003）は、高階層と低階層の家庭では消費行動に違いがあり、高階層の家庭では塾や進学に資金を費やすが、低階層の家庭では娯楽性の強いものを買い与えることで子どもは「短絡的な人生設計」を描くことになり、みえない階層差があるとしている。すなわち、本研究では子どもの学習意欲の形成には、娯楽的消費行動はあまり影響を与えないという結果がでたものの、そもそも下層出身者は、正統的読書文化資本に親和的になれず、大衆文化への接触を強める。その一方で、高階層の者は、正統的読書文化資本への親和性を保ちつつ、大衆文化にも親和的になるという「文化的オムニボア」（片岡 2000）の状態にあるとされる。このことから、本研究においては、娯楽的消費行動は学習意欲に影響を与えないという結果がでたと考えられる。

今回の分析では、文化資本の転換を基盤とし、リスクの重層化（集積）による社会的排除という観点から子どもの学習意欲について検討してきた。本研究で明かになったように、下層出身者は、親世代ですでに社会階層から客体化された文化資本を通じ、正統的読書文化資本が剥奪されるというリスクの重層化（集積）から、文化的・社会的に排除されていた。そして、親世代が客体化された文化資本から社会的に排除された結果、子どもも正統的読書文化資本に非親和的になり、大衆文化へのコミットメントを強めてしまう。ここでも、文化資本の相続と転換から、リスクの重層化（集積）による社会的排除が起こっている。こうして社会的に排除された者は、正統的読書文化資本への非親和性を通じて最終的に学習意欲を失ってしまう。下層出身者では、社会階層上の不利という最初のリスクが連鎖的に次のリスクを誘発する。こうして下層の子どもにリスクが集積し、「短絡的な人生設計」（鍋島 2003）を描く結果、学習意欲を剥奪されていると考えられる。

ただし、片瀬（2005a）によれば、正統的読書文化資本は主として母親から相続されるものであり、また、子どもの性別でも文化資本の相続と獲得の様式に差異があるとされている。今回の分析では、階層の指標として母親の階層的地位を取り上げておらず、また子どもを性別に分けて分析を行っていない。今後はこの 2 点を考慮して分析を進めることが課題である。

参考文献

Bourdieu,P.,1979, “Les trios étatas du capital culturel.” *Acts de la recherché en sciences socials*, 30 福井憲彦訳,（1986）文化資本の三つの姿」『アクト』1,pp.18-28

樋口明彦,2003,「現代社会における社会的排除のメカニズム：積極的労働市場政策の内在的ジレンマをめぐって」『社会学評論』55 （1）pp.2-18。

苅谷剛彦,2001,『階層化日本と教育危機』 有信堂高文社。

片岡栄美 ,2000,「文化的寛容性と象徴的境界：現代の文化資本と階層再生産」『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』pp.181-221 東京大学出版会。

片瀬一男,2005a,『夢の行方』東北大学出版会

片瀬一男・木村邦博・阿部晃士編,2005b,『教育と社会に対する高校生の意識：第 5 次調査報告書』東北大学教育文化研究会。

鍋島祥郎,2003,『効果のある学校』 解放出版社。